

Thalassiothrix longissima 少し、
Astellonera japonica
Nitzschinia longissima
Pleurosigma affine

(10) 泡盛岬東部南風原の箇所

勝連半島の東部に水深4-6尋位の場所が相当広くあるが底質は軟泥で5尺位も堆積しているという。その南風原側にヒナラー干潮と称する潮と三つの粗長い潮が西から東に一列に並んでいる。その各潮と南風原の潮との間にも水深4尋位の場所があるが、泥3対砂4位の軟質底部で4尺位の堆積をなしている。

該所の傾斜地帯も南風原地先と同様に泥分の少ない場所があり珪藻類も同様にあるが、淡水の注入少なく比重が1.02705もあるので藻貝の適地とは言い難い。

(11) 天國川下流附近

天國川の流入する岸近くから西北部の約150米位の所は砂礫質で20寸位は岩石地帯である。川水は北東寄りに斜に注入しているが干潮線附近は大粒の砂質で、干潮線下になるに従って細い砂になり泥分も増していつている。

河水の流入する東側に石見垣の跡の様な石垣が北東に突出しているがその東側に干潮時でも露出しない砂質帯が広範囲に亘つてあるが泥分15%で、アジモ様の藻が生え莖質堅く浅瀬、蛤の繁殖適地とは言い難い。偏かに河水の注入する部分は適度の砂泥割合の箇所があり、珪藻類も採取されたが比重1.027もあり、尚北向になっているので冬期波浪が強いことが予想されるので浅瀬、蛤類の適地と認め難い。Planktonの種類次の通り
橈脚類最多。Chaetoceras, δP 稀多い。

Fragilaria cylindrus
Thalassiothrix longissima
Nitzschia longissima

3. 風目魚稚魚採取及輸送試験並にベニツキ貝増息状況

調査 1956年5月4日

(1) ベニツキ貝について

此の地域に産する貝はクチベニツキガイ、*Codakia punctata* (Linné) とウラツキガイ、*Codakia inlerstan* (Lamarck) の外リュウキュウシラトリガイ *Quilnipegus palatan* Iredale である。当地では二枚貝の事を総じて「シナ」と呼びツキガイ類を「ミバギシナ」と云い、之は「トラホーム貝の貝」と言う意であるが其の産地は分らない。クチベニツキガイは円形で沖域位の大きさで採取貝の測定結果では殻長3.8耗、殻高3.7耗で殻頂は小さく先端は鋭い。殻色は白であるが輪脈に沿うて、淡紅紫色の細帯状を呈する。

殻内面は白色であるが殻縁は大幅な美麗な紅状を呈している。ウラツキガイもクチベニツキガイと等同様の形相であるが殻頂一帯は淡黄色を呈し、殻内面は黄色で殻縁の大幅な紅色が帯状にあるため黄月形の模様を彩どる極めて美麗な色彩でクチベニツキガイより一層美しい。

久松地先一帯の砂地に産するが、特に砂だけの所に棲息しているようである。これは粗砂で砂中約20厘米に潜入し水深は干潮時汀線位である。リュウキュウシラトリガイと共に干潮時に地先婦女子の漁獲の好対象で汁菜に重宝され、一潮時に1人の漁獲が約3升位の確である。採取器具は幅約15厘米厚5厘米長200厘米の身部に約100厘米位の握り柄のあるセメントヘラ型鉄製のものである。

尚其の他の貝においては見るべきものは少いようである。

今次大戦による浅海資源の減耗も又甚しいようである。此のため浅海資源の増殖計画により日本より始等の重要貝類の移殖も行われているが、現前沖で見られたベニツキガイ等の在来貝の移殖増殖も又重要な事と思考される。今回の調査は久松地先だけに限定されたが、此の地先の殆んど砂だけの所に棲息している。

宮古島周辺の互砂地帯には産するものと思われるが沖縄島浅海への移殖は1月又は2月頃以後春先にかけて行えば充分可能と思われる。

(四) 虱甘魚について

池間島入江は池間島南と其の対岸の池間小中校を結ぶ2本の石堤を以つて外海と区分され暗渠を以つて通じている。此の入江の中間東岸内陸地は砂地で埋地帯である。この為四圍の砂を掻き上げて出来た甘藷島が多いが、砂を掻き取られた所は水深20~30厘米の帯状池を成しており、此の水深